

稲作だより

第2号

令和6年4月8日発行
山形おいしさ極める！
米づくりプロジェクト
西村山農業技術普及課
TEL：0237-86-8287

平年より**高い気温が続く見込み**です。

きめ細やかな水管理、温度管理で健苗育成を行いましょう！

播種準備のポイント

○ 育苗時の施肥

- ・基肥施用量は窒素成分で **2g/箱**を基準とします。
- ・購入培土を使用する際は、保証分量を確認し、苗の種類に応じて追肥します（表1）。

表1 追肥時期の施肥量

苗の種類	追肥時期	施肥量(窒素成分量)
稚苗	1.8葉期	1g/箱
中苗	2.0葉期と3.0葉期	1g/箱

育苗用肥料に緩効性肥料を使用している場合、追肥は不要です。

○ 浸種

- ・水温 **10～15℃**、積算温度（日平均水温×日数）で「**120℃**」を目安に浸種を行います。
- ・浸種開始時の水温が **10℃以下**だと、**発芽率が低下**することがあります。
- ・浸種時の水温が **15℃以上**になると、**ばか苗病の発生リスク**が高まります。
- ・浸種時は2～3日ごとに水を交換し、時々種子袋の上下を入れ替えるなどして、酸素不足や温度ムラにならないよう管理しましょう。

○ 催芽

- ・30～32℃の温湯に、芽と根が **1mm** 程度出た「ハト胸状態」になるまで浸します。十分に浸種した種籾であれば、約20時間で「ハト胸状態」になります。
- ・**本年は催芽から目切れまでの時間が、例年より長い状況**が見られています。**必ず、芽切れしていることを確認してから、播種作業**を行いましょう。

○ 播種

- ・苗種に応じて、適正な播種量（乾籾重）と育苗日数を守りましょう（表2）。
- ・田植適期（5月15～20日）から逆算し、適正な時期に播種作業を行いましょう。
- ・播種時の灌水は覆土前に行い、覆土に水が染みてくる程度を目安にしまししょう。

表2 適切な播種量と育苗日数

苗の種類	乾籾重(g/箱)	葉数	育苗日数	必要箱数
稚苗	150～180	2.5枚	20～25日	22箱/10a
中苗	80～120	3.5枚	30～35日	27箱/10a

育苗初期のポイント

○ 育苗初期の温度管理

稚 苗（育苗器で出芽する場合）		中 苗（無加温で出芽する場合）			
出芽期 (2日程度)	30～32℃		出芽揃いまで	20℃以上	
緑化期 (3日程度)	昼 間	夜 間	出芽期～ 1.5葉期	昼 間	夜 間
	20～25℃	10℃以上		30℃以下	5℃以上
緑化期以降	15～20℃	5℃以上	1.5葉期以降	15～20℃	5℃以上

○ 出芽揃いまでの管理

- ・ **温度計は2つ**（①ハウスに吊り下げて苗の高さに設置、②苗箱の土中に差し込み）準備し、苗の近くの実際の温度を確認しましょう。

【無加温出芽の場合】

- ・ 出芽揃い後も被覆を続けると軟弱苗になるので、芽の長さが覆土から **5～10 mm**になったら被覆資材を外す。

【加温出芽の場合】

- ・ 必ず芽の伸びを確かめて育苗器から苗箱を取り出す（育苗器に入れる目安は2日間）
- ・ 事故防止のため、温度調節器（サーモスタット）は使用前に必ず点検し、温度計で実際の温度とズレがないか確認する。

○ アルミ蒸着シート使用時の注意点

- ・ アルミ蒸着シートを使用する場合は、好天時に播種を行い、苗箱を並べた後、苗床の温度が **20～30℃**となるように日光で温めてからシートを被覆して、シート内の適切な温度を確保しましょう。
- ・ 苗床の温度が、**32℃を超えると高温障害の発生リスクが高まる**ので、温度計で必ず温度を確認しましょう。※出芽揃い後も被覆を続けると、苗は軟弱徒長になります。出芽後は速やかに資材を外しましょう。

○ 基肥の施用時期

【基肥(速効性肥料)】

- ・ 圃場に施用された後、時間の経過とともに流出します。
→ **基肥(速効性肥料)**は、できるだけ代かきの直前に施用しましょう。

【基肥一発肥料(緩効性肥料)】

- ・ 田植日を施肥日として設計しているため、施肥から田植までの間隔が長くなると、生育後半に窒素が不足する恐れがあります。
→ **基肥一発肥料(緩効性肥料)**は、田植え 10 日前以内の施用を心がけましょう!!

STOP 農作業事故!! 農薬適正使用を徹底!!